

Langacker の認知文法では、動詞の状態／動作¹というのは、個々の動詞自体が持つ性質ではなく、単なる用法に過ぎず、基本的にはどの動詞も適切な文脈さえ整えば、動作用法／状態用法のいずれでも用いられるという説明がされている²。本研究では、どのような形で言語現象として具現化された場合、その動詞が2つの用法（perfective/imperfective）のいずれに捉えられるかを、名詞の2つの用法の場合と並行的に考える。

Langacker は、be + V-ing 形に関しては、perfective な用法の imperfective 化であるという説明をしているが、この説明は、現在形の場合、発話に必要な時間と事態の展開に必要な時間は一致するという原則からスタートしての整合的な説明であり、より高次元のスキーマとしての現在形のイメージと言える。具体的には、imperfective な動詞は、全体としての安定感があり、始まりと終わりは意識されなという特徴をもつので、スキミングとサンプリングのプロセスを経て、発話時にサンプリングした事態が、その事態全体の代表となるので現在単純形で表わすことができるが、perfective な事態は、事態展開の内部は不均質で、次の瞬間には変化し、始まりと終わりが意識されるというイメージを持つため、be + V-ing によって事態展開を凍結させて引き延ばすことによって imperfective 化し発話に必要な時間と一致させることで、言語表現を可能にするという説明である。しかし、この説明は、用法基盤モデルで言う高次元のスキーマまで達した説明であるため、カテゴリー化という意味では価値がある一方、英語教育という視点から教育・学習文法を設計するにはスキーマ度が高すぎると思われる。関連して、Taylor (2002: 404)でも、現在進行形という構成体には、一時性という意味があることが指摘されており、このことは perfective 動詞の imperfective 化ということより重要ではないかということが言及されている³。また、Langacker も認知文法では、units と schema（低い次元のものから高い次元のものまで）が文法の中に共存し、発話の場面ではいずれもが必要に応じて用いられるという言及をしている（Langacker 2002: 265）ので、これらのことを参照し現在単純形と現在進行形という構成体のレベルで、それらの構成体のイメージを定義し、コミュニケーションにおける参照点としての発話の意味解釈を整理し、英語教育への適応を考える。

現在単純形は、動詞が未完了用法（imperfective）としての読みを要求することを示す参照点である。つまり、発話時にピックアップされた事態が、時間上のどこをピックアップしても均質な事態の代表であるという捉え方を要求する。換言すれば、始まりと終わりは意識されず、長期間継続するという捉え方である。一方、現在進行形は、動詞が完了用法（perfective）としての読みを要求することを示す参照点である。つまり、現在進行形によって表わされる事態は、始まりと終わりという区切りが意識され、発話時はその途中であるという感覚を表す。つまり、一時的であるという捉え方がされる。次の例文(1)を観察してみたい。

(1) a. You look a bit like Obama.

¹ Langacker は、従来の動作／状態ではなく、perfective/imperfective という用語を用いている。

² この動詞の動作／状態という区別は、名詞の可算／不可算という区別と並行性があり、同じ概念が前者では process に、後者では thing に適応されている。

³ construction, 構文と呼ばれることが多いが、本論では、山梨 2009 の用語、「構成体」を用いる。

b. You're looking a bit like Obama.

a は、オバマに少し似ているという安定感を表す表現である。b はどうか？一時的にオバマに少し似ているとはどういうことか？これは、服装や髪形が似ているという解釈を受ける表現である。構成体の「一時性」という意味と語彙の「似ている」という意味の相互作用から、このように全体の意味は解釈されるのである。この他、英語母語話者に筆者が行った調査結果にも言及した考察も行う。

さらに、die や stop のように一瞬で完了し、連続して行為を繰り返すことが通例不可能な動詞に関しては、その行為の完了へ向かう前段階も行為の一部と捉え、完了に向かう途中といった解釈を受ける。しかし、die は、次の例文(2)a, b、c で観察されるように、a では、完了へ向かう途中という解釈を受けるが (図 1)、b では、通時的及び共時的に繰り返される一連の行為の途中という解釈を受ける (図 2 (b))。そのイメージは、He's hiccupping. や The light is blinking. などの punctual で atelic な事態と viewing frame の大きさは異なるが共通している。c は ambiguous である。入院している人が病室から窓の外を眺めての発話であれば図 2 (a)、秋に一般論として発話するならば図 2 (b)となる。

(6) a. My battery is dying.

b. Many people are dying in some parts of the world due to starvation.

c. Many leaves are falling.

このように、現在進行形のコアイメージが文脈情報との相互作用でどのような解釈を受けるかを viewing frame と granularity の道具立てでその他の言語事例にも言及しながら考察したい。

図 1

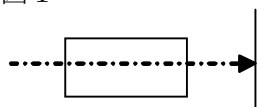
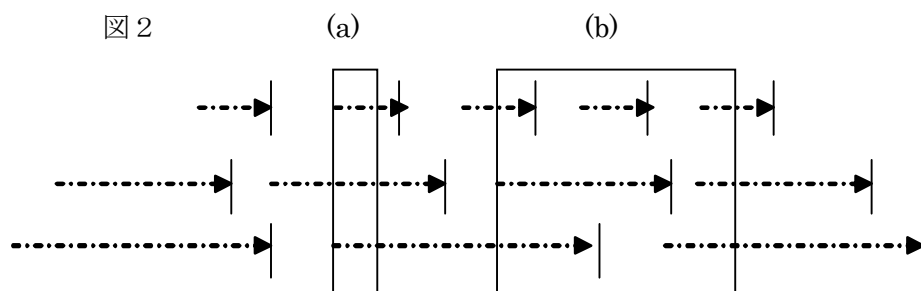


図 2



参考文献

Langacker, R. W. (2002). Concept, Image, and Symbol - The Cognitive Basis of Grammar. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

-----.(2008). Cognitive Grammar – A Basic Introduction: Oxford University Press.

Radden, G & Dirven, R. (2007). Cognitive English Grammar. Amsterdam: John Benjamins

Publishing Company

Taylor, John R. (2002) Cognitive Grammar, New York: Oxford University Press.

山梨正明（2009）．『認知構文論---文法のゲシュタルト性』大修館書店